

山の本を楽しむ

藤井 論

第6回 新田次郎著「孤高の人」

【概要】

昭和初期、ヒマラヤ遠征の夢を秘め、限られた裕福な人々だけのものであった登山界に、社会人登山家としての道を開拓しながら日本アルプスの山々を、ひとり疾風のように踏破していった“単独行の加藤文太郎”。いかなる場合も脱出路を計算に入れた周到な計画のもとに単独行動する文太郎が初めてパーティを組んだのは昭和11年の厳冬であった。家庭をもって山行きをやめようとしていた彼は友人の願いを入れるが、無謀な計画にひきずられ、吹雪の北鎌尾根に消息を絶つ。日本山岳会に不滅の足跡を遺した文太郎の生涯を通じ“なぜ山に登るのか”の問いに鋭く迫った山岳小説屈指の力作である。

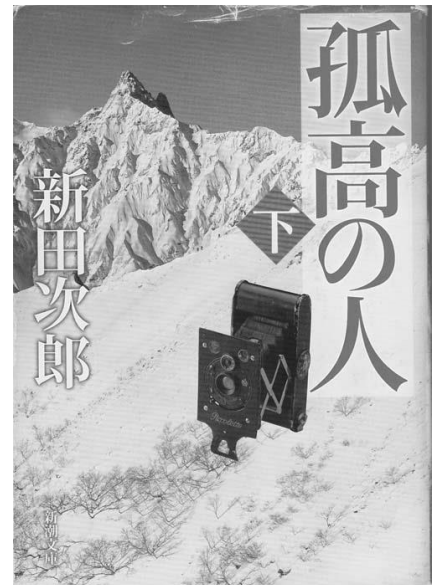
【内容のポイントと感想】

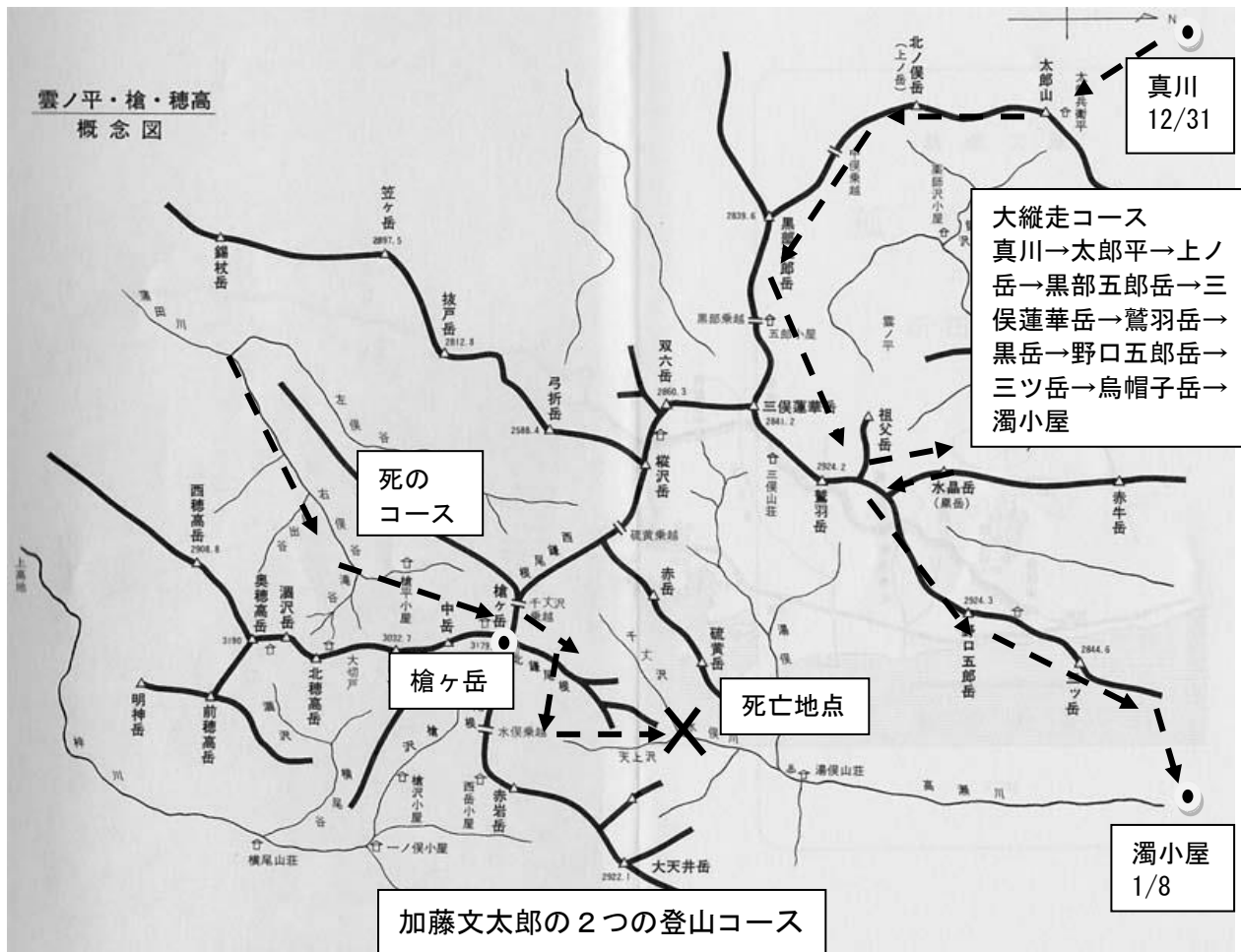
加藤文太郎は日本海に面した浜坂町に生まれ、15歳で神戸の造船所に勤めながら登山を続け、31歳で遭難死するまで疾風のように駆け抜けた男である。20歳で和田岬から宝塚まで六甲山を50キロ縦走し、さらに50キロ歩いて17時間で和田岬まで戻り世間を驚かせた。厳冬の八ヶ岳、富士山など単独行で次々に成功し「不死身の加藤」と呼ばれるようになった。

昭和3年正月の厳冬期、加藤は富山県の真川から長野県の濁温泉まで、北アルプスの大縦走コースを単独で成功した。そのルートを次頁の概念図の大縦走コースで示す。七日間の食糧、燃料、防寒具と冬山に必要なものをキスリングに詰めてスキーで進み、山頂部ではアイゼンに履き替えた。しばしば吹雪に阻まれ三俣蓮華で何も見えない時は磁石を使って確実に進んだ。野口五郎岳では山小屋にたどり着けず、雪洞でのビバークを強いられた。烏帽子小屋付近ではルートを見失い、磁石をたよりに高瀬川に下って濁小屋にたどりついた。10日目に無事下山したが、下界では「関西山岳界の麒麟児加藤文太郎北アルプスで遭難か」と大騒ぎになっていた。次は神戸に到着した時に次のように新聞記者に取り巻かれた時の記述である。

「連日吹雪だったそうですね」「食糧はどうしました」「燃料は」「なだれにやられませんでしたか」「たったひとりで十日間も吹雪の中を歩いて、越中から信濃へ越えたなどということは常識では考えられないことです。なにかそれを証明するものがありますか」「あなたは登山予定を誰にもいわないで、山へ行ったというがほんとうですか」「あなたが遭難するのは、あなたが好きでやったからしょうがないとして、はたの人にかかる迷惑をどう考えていますか」加藤は突立っていた。答えようがなかった。みんなが、自分を責めていることははっきりしているが、なぜみんなが自分を責めるか、それがわからなかった。黙っていると、それが肯定に取られるようにも見えたが、加藤は頑強に沈黙していた。その加藤の態度が新聞記者を刺激したようだった。(中略)「藤木さん、ぼくはいったいどうしたというんです」「どうもしないさ、きみはおれと一緒にビフテキを食っているだけのことだ。飯を食ったら下宿へ帰るんだな。新聞のことなんかあまり気にするな。とにかくきみは、誰にもできないことをやったのだ。単独行の加藤文太郎が完成したのだ」そうって藤木久造はコップのビールを飲み干した。

故郷浜坂で幼馴染みの花子と結婚して長女登志子が生まれ、加藤はしばらく山から遠ざかった。しかし昭和11年、山の後輩宮村から冬の北鎌尾根に挑戦するからザイルを組んでくれ、と頼られて断りきれなくなった。普段の単独行でない加藤に花子は不吉を感じ必死に止めたが、宮村に懇願されて断りきれず出発した。槍の肩の小屋まで登ったが吹雪の中を宮村に強いられてわずかな食料で槍の穂先に登り、さらに北鎌尾根に挑むことになった。レンズ雲が発生して間もなく突風が吹き荒れ、二人は急斜面





でのビバークを強いられた。極寒のビバークでダメージを受けた宮村は登攀中に滑落し、ザイルで結ばれた加藤はそれに巻き込まれた。天井沢に落ちて槍ヶ岳に戻ることは困難となり、やむを得ず湯股に向けて降りることになった。しかし深い雪に阻まれて遅々として進まず、宮村は力尽きて動かなくなった。加藤は耐えて進んだが食料が尽き凍傷で足の感覚もなくなり、第三吊橋を前にして幻覚を見るようになった。上の概念図に死のコースを示す。次は最後のシーンの記述である。

吹きだまりの雪の中に胸まで入って、そこを、ほとんど手の力で這い出したところで、加藤は第三吊橋を見た。第三吊橋は雪におおわれていた。「勝ったぞ、おれは生還できたのだぞ」加藤は吊橋に向かって言った。北鎌尾根に入ってから今日まで、人工物にはなにひとつとして行き当たったことはなかった。そこに第三吊橋を見たことは、人の住む帰路を発見したことであった。(よしあとは岩小屋を探すことだ。たしかにこの辺に岩小屋があるはずだ。)加藤は周囲に眼をやった。景色が急速に暗転していった。太陽が雲に入ったときの推移のようではなく、突然に日蝕が起ったような暗くなりかただった。眼の前にあった吊橋が消えて、そこらに、長田神社の常夜灯が見えた。加藤の家は、その灯を右に見て、通り過ぎたところを左に曲ればよかった。曲り角の家の犬が、加藤に吠えついた。いつものことである。加藤がピッケルを上げると、その犬は尻尾を巻いて塀の中に逃げ込んで、そこでまたうるさく吠え立てた。加藤の家の門灯が見えた。障子も明るかった。花子は起きているのだ。加藤は花子に、最初にかけるべき言葉に迷った。あまり驚かすようなことをいってはいけない。さてなんとおおうかと考えているうちに、家の門に立っていた。格子戸の鈴が澄んだ音を立てて鳴った。「花子さん、いま帰ったよ」加藤はそう言ってから、そうだ、花子さんではなく、花子と呼ばねばならなかったのだなと思った。加藤の唇に微笑が浮かんだ。「疲れたよ、こんなに疲れたことはいままで一度もなかった」加藤はつぶやいた。眼をつぶると、疲労が身体の隅々にまでゆきわたって、もう手を上げることも足を上げることもできないほどだった。「だが、とうとうおれは家に帰ったのだ。ゆっくり眠ることのできるわが家に帰ってきたのだ」加藤はゆっくり雪の中に腰をおろして、二度と覚めることのできない眠りに入った。(つづく)